

いもち病に対する抵抗性誘導苗箱施薬剤の防除効果の検証

水稻のいもち病少発条件下ではプロベナゾール粒剤、イソチアニル粒剤の播種時施用、移植時施用のいずれでも出穂前までの長期間、高い防除効果がみられた。一方、中多発条件下ではプロベナゾール粒剤の播種時施用の防除価は他の区よりやや劣る傾向が認められた。

内容

兵庫県内では水稻の重要病害であるイネいもち病の防除に、オリサストロビンなどのQoI剤※を広く使用してきたが、2013年の耐性菌発生に伴い、播種時処理できる代替剤が求められている。

そこで、QoI剤耐性菌発生後の県内のいもち病防除対策に活かすため、抵抗性誘導苗箱施薬剤の播種時施用と移植時施用の効果検討を行った。

2014年から2016年の3か年、場内と現地の2圃場、5試験を行った結果、少発条件下では、プロベナゾール粒剤とイソチアニル粒剤の播種時施用と移植時施用で、95以上の高い防除価が出穂直前まで長期間持続した(図1)。

一方、中多発条件下ではプロベナゾール粒剤の移植時処理とイソチアニル粒剤の播種時・移植時

処理は中多発条件下でも出穂直前まで防除効果が持続したのに対して、プロベナゾール粒剤の播種時施用の防除価は他の区と比べてやや劣った(図2)。

また、QoI剤耐性菌を接種した2015年の現地試験から、いずれの処理も高い効果が認められた。

普及上の注意事項

中山間地での普通期作型の水稲など、移植30日後頃からいもち病の発生が懸念される場合は、イソチアニル粒剤の播種時・移植時施用、プロベナゾール粒剤の移植時施用を選択する。

※QoI剤菌の呼吸をつかさどるミトコンドリアのタンパク質の働きを止める剤

内橋 嘉一 (病害虫部)

(問い合わせ先 電話：0790-47-2417)

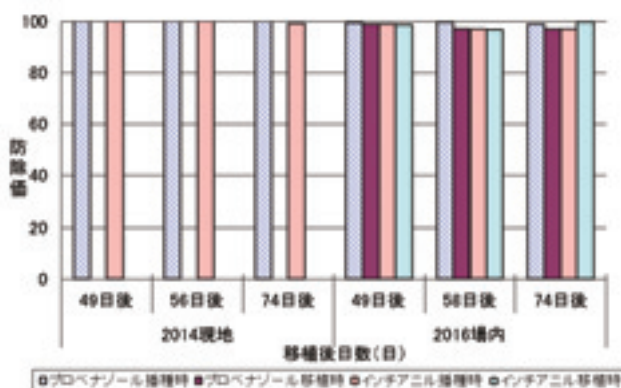


図1 少発生条件下の箱施薬剤の防除効果

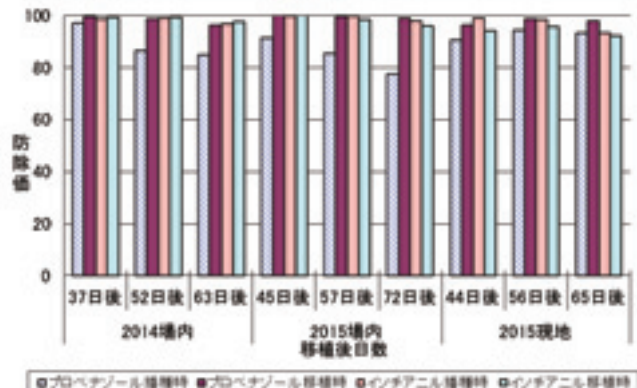


図2 中多発生条件下の箱施薬剤の防除効果